第十九講　学問論その２

「生命は学習である」とよく言われる。私たちは学ぶことによって生き、生きることによって学ぶ。すべての人間的行動の基礎には知が横たわっており、私たちは生きる上でその知を動員する。そして、さらに知るために行動し、知るがゆえに行動する。しかし、知るとはいったい何であるか、私たちは意外にそれを知らない。

知るとは、存在するものを知覚し、思考することである。言い換えれば、存在しないものを知ることはできない。知るとは、そこに何かがあることを意味している。それが何であるかを知らないとき、私たちは行動の手がかりを失って不安になる。では、何かを知っているというとき、私たちは実際それをどれほど知っているだろうか？

私たちは友人を知り、自分の町を知り、国を知る。しかし友人について、私たちは間違うことがある。自分の住んでいる町も、隅から隅まで知っているわけではない。国については、なおさらそうであろう。このわずかな例からしても、［　A　］ことがわかる。

存在するものを絶対的かつ全体的に知ることはできない。私たちは自分の感覚と理性によって物事を知る。つまり私たちの知は、身体と精神の枠組みに則して働くのである。逆に言えば、私たちは存在を知覚し思考する手段そのものによって、存在から切り離されている。知は媒介によって成立する。すなわち、［　B　］。

事物をありのままに知ることはできない。おそらく、人間の眼とはべつの眼は、人間の眼に映る風景とはべつの風景を見るであろう。たとえば、人間の色彩体験にとって大きな意味をもつ緑の世界は、昆虫にとって明るい灰色に見えると推測されている。人間の脳とはべつの脳は、べつの思考をするであろう。正確さと厳密さだけを理想としない精神なら、いまあるものとはべつの数学、べつの物理学を構想するかもしれない。ロボットにとってならばともかく、科学的な知識でさえ完全に客観的な知ではありえない。

つまり、真実を存在との合致と定義するなら、知と真実とはべつのものである。けれども、真実からまったく離れた知を、知と呼ぶことはできない。それはたんに過誤であるか、幻覚であろう。いかなる知も絶対的ではありえないが、だからといって、

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

［C］。

宇宙の運動について、コペルニクスとニュートンの理論は、古代ギリシアのプトレマイオスの理論より真実に近い。そしてアインシュタインの相対性理論は、さらにいっそう真実に迫っている。相対性理論はそれまでの理論を説明するが、それまでの理論は相対性理論を説明することができない。ここから次のことが言えるだろう。知はすべて相対的であるが、［D］。

だから科学史というものが成立し、そこには［E］的な進歩が見出される。科学の歩みのなかで一度犯された誤りが、同じままに繰り返されることはない。科学理論は検証され、テストされ、それに合わない事実がひとつでもあれば、誤りとして退けられる。そして検証に耐えうる理論が、それに代わって提起される。言ってみれば、理論の淘汰が行われるのである。ここから言えるのは、どのような科学理論も相対的かつ一時的な真理であるということだ。

むろん、科学は知の理想的な形態である。けれども、科学的なものだけが知であるわけではない。私たちは科学によって保証されていない多くの事柄を知っている。実際、自分の嗜好による事物の選択を、私たちはいかなる科学によって教えられたわけではない。このことは感覚や経験が、たとえ限定されたものであっても、すでにひとつの知であることを意味しているだろう。

さらに言えば、［F］。たとえば、裁判所で証言を求められるとする。しかし、その証言が科学的であるとは言えない。自分の見たもの、自分の見たと信ずるもの、自分の知っていると信ずることを述べるよう求められるだけだ。だから、そこには間違いも起こりうる。したがって、複数の証言が望ましい。しかし、そうした複数性も、真実にいたる可能性を仮定しているだけである。そして、この仮定された真実がなければ、有罪と無罪の差が存在しなくなる。私たちは真実が存在し、それに触れることができると信ずることによって、誤りと戦っているのだ。

ただし、この仮定された真実をけっして固定してはならない。真実が固定されたとたん、私たちはそれ以上考えることをやめてしまう。あるいは、固定された真実との関係でしか物事を考えなくなる。しかしまた、そうした固定を避けようとして、真実はどこにもないということも、思考を同様に停止させる。なぜなら、真実がどこにもないとしたら、真実がないということも真実ではなくなり、すべてが曖昧さのなかに放置されてしまう。

私たち人間の行動の基底にある知は、私たちの限られた感覚と経験を通じて日々流動し変化しつつ、明らかなるものを求めて旅をつづけている。言い換えれば、私たちには学ぶことがつねにある。人間の知はこの意味において、無知蒙昧と全知全能の間

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

にあると言っていい。だからこそ、知は進歩する。

問１　空欄［Ａ］〜［Ｄ］に入る最も適当なものを、次の中からそれぞれ選べ。ただし、同じ記号を二度以上選んではならない。

①　知は信心でも意見でもない　　②　知と科学とはべつのものである
③　直接的な知というものはありえない　　④　完全なる知というものは存在しない
⑤　すべての知が同じ価値をもつわけではない

問２　空欄［Ｅ］に入る最も適当な語句を、次の中から選べ。

①　不連続　　②　合理　　③　不可逆　　④　飛躍　　⑤　不可避

問３　空欄［Ｆ］に入る最も適当な文を、次の中から選べ。

①　真実の無視も起こりうる　　②　ありえない真実も存在する
③　真実とは関係のない知も存在する　　④　非科学的に見える知こそが真実である
⑤　科学的でない真実というものもありうる

問４　問題文の論旨および筆者の立場に合致するものを、次の中から一つ選べ。

①　知の進歩といっても、それは何の基準もないものであり、どこへ向かって進んでゆくのかわからない危険をつねにはらんでいる。
②　人間の知は身体と精神に条件づけられた相対的なものであるが、だからこそ私たちはありうべき真実を求めて探究をやめない。
③　抽象的な科学理論よりも、地道な感覚や経験に根ざした非科学的に見える知こそが、私たちの日常生活にとって大切なものである。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④　本能の壊れた動物である人間は、身の回りのわずかなものを手がかりに恣意的な知を構築して自分の生命を維持していくより仕方がない。

⑤　信心や意見は個人的な取捨選択の対象になりうるが、知は相対的に見えてじつは絶対的なものに触れているので、どのような知も尊重せざるをえない。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十九講　知識モノ解説

語句

嗜好＝しこう→個人の好み　嗜好品→必需品ではなく好みで選ばれるもの。タバコやコーヒー、紅茶など

類義語　奢侈品＝しゃしひん→ぜいたく品

無知蒙昧＝むちもうまい→知識が不十分で道理が通らない。知恵の光がとどかないこと。これに知恵の光を当て、教え導くことが「啓蒙＝けいもう」。知恵の光をラテン語で「ルクス・ウェルターティス」

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第十九講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

		①	②	③	④	⑤
（ア）	スミからスミまで知っている	済	端	末	隅	角
（イ）	身体と精神のワクグみ	粋	涌	枠	惑	湧
（ウ）	知はバイカイによって成立する	培	媒	賠	陪	倍
（エ）	シキサイ豊かな表現	菜	彩	催	採	蔡
（オ）	新しい学問をコウソウする	講	効	構	考	高
（カ）	仮説と真実とのガッチ	致	知	値	智	弛
（キ）	知はすべてソウタイ的である	帯	体	耐	対	態
（ク）	理論を実験でケンショウする	顕	験	研	険	検
（ケ）	思考をテイシする	挺	艇	停	態	亭
（コ）	人間の行動のキテイにあるもの	底	呈	抵	低	体

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十九講　学問論その2

《本文の対比構造》

主役

筆者の見解＝人間の知は、無知蒙昧と全知全能の間＝媒介的な知・相対的だが進歩がある知・一時的仮定的真実／科学的な知・感覚的経験的な知

主な対比

比較相手その1

絶対的な知・全体的な知・完全に客観的な知・存在との合致

小さな対比

比較相手その2

真実からまったく離れた知・過誤・幻覚・無知蒙昧

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

《解説》

問１《キーワードに関する空欄補充・選択肢》

Ａ・Ｂは、《本文の対比構造》の「比較相手その１」との対比です。まず、Ａは、直前の具体例（友人についても間違うことがあるなど）をまとめる表現です。さらに次の段落で「絶対的かつ全体的に知ることはできない」と言い換えられています。したがって④と決まります。Ｂは直前の「知は媒介によって成立する」の言い換えになります。さらに次の段落の「事物をありのままに知ることはできない」との表現に続きます。したがって③となります。Ｃは、「比較相手その２」との対比です。絶対的な知がないからといって、なんでもありというわけではないということです。また次の段落以降で、科学的な検証が必要との内容につながります。したがって①と決まります。Ｄは「相対的（唯一絶対の対義語で、それぞれということ）」であると同時に、そのそれぞれには価値の段差があるということです。つまりより真実に近いかどうかで差があるという意味です。したがって、⑤が正解。

問２《キーワードに関する空欄補充・選択肢》

知あるいは科学理論には、科学史上の進歩があるということです。前段落の例だと「プトレマイオス→コペルニクスとニュートン→アインシュタイン」の流れです。より真実らしさ、より包括的な説明力という流れで、元に戻ったりしないということです。したがって③の「不可逆」と決まります。

問３《キーワードに関する空欄補充・選択肢》

前段落に「科学的なものだけが知であるわけではない」とあります。その後「自分の嗜好（好み・この銘柄のコーヒーがおいしいと感じるなどの経験）」といった例が挙げられています。さらに空欄の直後からは、裁判の証言で真実へと接近していく具体例が始まります。したがって⑤が正解です。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問４《主題理解・選択肢》

①は、「比較相手その２」に当たるものです。これでは対比混乱の誤りですね。③は、科学より非科学的知を高く評価している点で×です。筆者は、科学的ではない知を認めていますが、はっきり「科学は知の理想的な形態」と記述しております。したがって記述に反する誤りです。④の「本能の壊れた動物である人間」との記述は本文にはありませんね。この表現は、早稲田大出身の精神分析学者である岸田秀氏のことばとしても有名ですが、ともあれ本文とは無関係です。さらに「恣意的な知」では、勝手気ままということになり、これも「比較相手その２」を答えてしまった対比混乱の誤りです。⑤は「絶対的」が対比混乱の誤りです。さらに「どのような知も尊重」は、記述に反するといってもよいですし、不当な全称判断といってもよいです。②が正解です。

模範解答

問１　Ａ＝④　Ｂ＝③　Ｃ＝①　Ｄ＝⑤　問２＝③　問３＝⑤　問４＝②

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題解答　第十九講

（ア）④　（イ）③　（ウ）②　（エ）②　（オ）③
（カ）①　（キ）④　（ク）⑤　（ケ）③　（コ）①

解答漢字一覧

（ア）隅　（イ）枠組　（ウ）媒介　（エ）色彩　（オ）構想
（カ）合致　（キ）相対　（ク）検証　（ケ）停止　（コ）基底

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。